流通とＳＣ・私の視点

2016 年 12 月 7 日

視点(2055)
（ＳＣ理論編）

マダガスカル島のキツネザルの多様化及びパンダの竹の美味化(美味しい化)現象とSCとの関係（その１）!!

ＳＣのライフサイクルは「成長Ⅰ期」（ＣＳＣの成長期・1971～1990 年の 20 年間）と「成長Ⅱ期」（ＲＳＣの成長期・1991～2010 年の 20 年間）を経て「飽和期」（ほぼ全国的に１つの固有マーケット内で２ＳＣが成立し、売り手も買い手もほぼ全国的に行き渡ったと感じる期間・2011～2020 年）へと進みます。では、ＳＣの飽和期の後はＳＣが必要なくなり、開発が行われなくなるのでしょうか？

その答えとなるのがアメリカのＳＣ状況ですが、アメリカにおけるＳＣの飽和期は 1980 年代の 10 年間です。アメリカは 1991 年からＳＣは成熟期となり、ＳＣの成熟期ではＲＳＣが多様化して１つの固有マーケット内に飽和期における２ヶ所の成立から現在の 3.4 ヶ所（日本は１つの固有マーケットの中に 2.1 ヶ所）となっています。つまり、アメリカのＲＳＣは日本の 1.6 倍の多様化が進展しています。

これは、アメリカにおいて斬新なＲＳＣが新たに開発されたのと同時に、既存ＲＳＣがリニューアルによって斬新化し、客から見て新しいＲＳＣとして登場したことによりＲＳＣが多様化しているためです。それゆえに、現在アメリカのＲＳＣは量的には年間わずかした増大していませんが、リニューアルにより客から見て斬新なＲＳＣが続々と開発され質的には増大しています。実は、アメリカのＲＳＣは新規開発こそ少ないのですが、リニューアルによる既存ＲＳＣの斬新化は大いに進み、客から見た斬新ＳＣが高い成長を示しています。

ここで、ＲＳＣの飽和期から成熟期に向かってＲＳＣが多様化するメカニズムを比喩論**「マダガスカル島のキツネザルの多様化及びパンダの竹の美味化（美味しい化）現象」**として説明します。

ＳＣの多様化を説明する普遍のモデルに「マダガスカル島のキツネザルの多様化現象」があります。

マダガスカル島はアフリカ大陸から 400 ㎞離れた孤立した島（ＳＣ的には１つのマーケット）で、大きさは日本の 1.5 倍の面積です。マダガスカル島には太古、キツネザルは住んでいませんでした。しかし、5,000～6,000 年前にアフリカ大陸からキツネザルの集団が何らかの理由（アフリカ大陸のジャングルの大洪水で流木に集団で流れ着いたと推定）で住み着きました。マダガスカル島には猿がいなかったので、熱帯雨林の中に果実・木の実等の食べ物（ＳＣ的には消費マーケット）が豊富にあり、猿のエアポケットでキツネザルは増えに増えました（ＳＣ的にはＳＣがないエアポケットマーケットの中でＳＣが増えに増えた成長期）。しかしながら、キツネザルの数と従来型の食べ物（果実や木の実）との一定のバランスが均衡し、いわゆるキツネザルにとって食べ物の飽和状態となり、これ以上キツネザルが増えると食べ物が不足する状態になりました（ＳＣ的にはＳＣの飽和期）。本来ならばキツネザルの増加（ＳＣの増加）はなくなるはずですが、マダガスカル島の動物業界(強力な肉食動物がいない)ではキツネザルが勝ち組（ＳＣも流通業界の勝ち組）でしたので、新たな食べ物（ＳＣにとっては新たなマーケット）を開拓し、マーケットを創出しました。ところが、新たなマーケットへの拡大は異なる食べ物である木の葉、草の実、昆虫、毒のある竹の子等の従来の食べ物とは異なるため、体の大きさ、体の仕組み、消化機能や住む場所…等の変化をＤＮＡ（遺伝子）レベルで行い、１つのＤＮＡのキツネザルが、これがキツネザルの一種かと思うほどの 80 種に多様化（ＳＣの多様化・これがＳＣか？というレベルまで変化）して、マダガスカル島の中で高いシェア（ＳＣはアメリカでは小売業の 54.5%のシェア）を取っています。

一方、マダガスカル島の中で「雨量差」「気温差」「地形の高低差」「地形の多様性」（熱帯雨林、平原、山岳、砂漠、渓谷）「植物の多様性」等により食べ物の多層性が形成され、この食べ物マーケットの多層性がまたキツネザルの多様性を進めてきました。今までのアメリカのライフスタイルの多様化、日本のこれからのライフスタイルの多様化はＳＣの多様化を導きます。マーケットが複雑性を持つことを**「マーケットの多層化」**と言います。

（流通とＳＣ・私の視点 2056 へ続く）

(株)ダイナミックマーケティング社[+6]
代　表　六（む）　車（ぐるま）　秀　之

Copyright (C) Dynamic Marketing Co. Ltd. 2016 All rights reserved.